

反リンチ運動家アイダ・B・ウエルズ

岩本裕子

一、はじめに

『われらの意志に反して』(Against Our Will)の著者スーザン・ブラウンミラー(Susan Brownmiller)は、黒人女性及び強姦に関する史料収集のためにニューヨーク公立図書館分館のションバーグ・ロレクシオン(Harlem Schomburg Collection)を訪れた。「黒人女性に加えられた歴史的不正に関心があるので史料を見せてほしい」と言うブラウンミラーに対して、司書の黒人男性は「黒人にとって、暴行^{レイプ}と言えば黒人男性への私刑^{リンチ}をさしてきた」と言い、黒人女性及び強姦の史料ならばリンチの項目に入っていると答えた。黒人男性にとって強姦はリンチを意味し、自分達が受けた被害ばかりで、黒人女性への強姦という抑

圧に気づく余地がないかのような史料分類だとブラウンミラーは解釈した。黒人関係の文献をかなり所蔵するションバーグ・ロレクシオンでさえ黒人女性や強姦の問題をリンチの問題に置き換えてきた。ではリンチの問題を検討することで、逆に黒人女性の歴史が見えてこないかとの試みが本稿である。

性、人種、階級という三つの重荷を背負う黒人女性の歴史研究は、近年までアメリカ史、南部史は言うに及ばず黒人史でも取り上げられず、女性史ですらほとんど研究が進んでいなかった領域である。「黒人と言えば必ず男性、女性と言えば常に白人」という歴史意識が強い中で、黒人でも女性でもなく黒人女性の立場から独自の視点を持つことでしか黒人女性の問題を解決できないという視点でアメリカでは近年になって研究が進んでいる。日本では、実証研

究の進んでいる黒人史でも、黒人女性対象の歴史論文は少ない。

本稿で対象とする黒人女性アィダ・B・ウェルズ (Ida B. Wells; 以下アィダと略記) は一九世紀末を生きた活動家である。アメリカ女性史研究 (白人女性で中産階級) の二大対象は一九二〇年の憲法修正第一九条獲得に至る婦人参政権運動と一九六三年以降の女性解放運動にあったと言える。前者とほぼ同時代に進行した反リンチ運動はアメリカ女性史を研究する場合に欠かすことのできないテーマである。婦人参政権運動には黒人女性も関わったとは言え、やはり主流は白人女性であったことを考えれば、同時代の黒人女性を取り組んだ問題では、反リンチ運動が重要な部分を占めていると言える。ことリンチの状況に限っても、映画「ミシシッピ・バーニング」 ("Mississippi Burning") に見られる一九六〇年代の南部は、七〇年前のアィダが生きた再建終了後の南部とほとんど変わっていない。一九六〇年代に比べその手法や戦略は洗練されていなかったが、公民権運動の源流は、二〇世紀転換期の黒人史に見い出せると考える。再建終了後、黒人選挙権剥奪の暴力的手段として多発したリンチに対して、全米で最初の反対運動を起し生涯を捧げたアィダの研究は、一九世紀末の黒人女性史研究ばかりへの貢献ではなく、黒人史、南部史、アメリカ

カ史の見直しに通じるものと確信する。

アィダ研究を整理すると、アメリカでは雑誌論文が二本、Ph. D. 論文が二本、さらに五点で紹介がなされている。日本では紹介が二点ある。先駆的研究であるタッカー論文では、これまでの男性の歴史を改め、女性の中でも特に黒人女性の歴史を語ることの重要性を強調してアィダを研究对象としている。彼女の反リンチ運動の出発点であるメンフィス市の白人市民の彼女への反応をその生涯を通して検討し、アメリカ南部の良識に訴えた存在としてアィダを評価している。アプシカーはアィダの所有した新聞社への暴徒の攻撃を言論への抑圧だと解釈し、ジャーナリストとして高い評価を与えている。ハットン (M. B. Hutton) の論文では、豊富な一次史料でアィダの講演や著作を詳細に検討し、中でも英国の新聞記事により訪英時の肯定的評価を論じている。歴史的評価より講演者としての評価を優先している。トンブソン (Mildred Thompson) の論文では、活動家としてのアィダが同時代の活動家から無視され、また白人女性から人種偏見の標的とされたのはなぜかと問題提起をし、アィダが下層階級と中産階級との溝を埋める存在であったことに対し同意が得られなかったことと、夫バーネット (F. I. Barnett) の抵抗運動家としての姿勢が、結婚後のアィダの人格形成に大きな影響を与え、地域社会

での活動に専念する方向へと活動の重点が変わっていったことが要因であると結論づけている。

性と人種の二重性を考えるとき、アイダ自身は女性の側面よりもむしろ黒人の権利獲得のために活動したと言える。同時代には黒人より女性であることを強調したメアリー・テレル(Mary Church Terrell)、『ジョセフィーヌ・ラフアン(Josephine St. Pierre Ruffin)』、『マーガレット・ワシントン(Margaret Washington)』等の黒人女性活動家は存在した。東部の自由黒人あるいは富裕な解放黒人のいわゆる中流家庭に生まれ、教育を受けたこの女性達とアイダの生い立ちには相違点が多い。本稿では黒人解放運動家の女性という側面から、アイダ自身に則して検討する。

時期は全米黒人女性協会(National Association of Colored Women: NACW)が設立された一八九六年までと限定する。大小一〇〇余りの黒人女性組織の統合体である全米黒人女性協会は黒人女性史にとって一つの分水嶺と言える。再建以降の黒人女性の活動の総括とも評価できるこの組織設立に至る黒人女性史に、アイダの反リンチ運動がどの様な影響を与えたかも検討したいためである。性よりも人種を重視したアイダが一八九六年までの黒人女性史にとつてどの様に位置づけられるのか、同時代の黒人女性にどのような影響を与えたのかを明らかにすることを本稿の目

的とする。これまで、黒人史の中の反リンチ運動家という評価の域を出なかったが、筆者は黒人女性史の中でのアイダの位置づけを試みたい。

註

- (1) Susan Brownmiller, *Against Our Will: Men, Women and Rape*, rev. ed., 1986, quoted in M. Wallace, *Black Macho and the Myth of the Superwoman*, Warner Books, N. Y., 1980. (矢島翠訳「強き性」お前の名は』朝日新聞社一九八二) 邦訳一六二―一六三頁。ウォルレスは同書で、女性史研究者ガーダ・ラーナー(Gerda Lerner)の黒人女性の母権制をめぐる解釈、つまり労働賃金面ではあらゆる集団の中でも最低だが、黒人の中の地位は白人社会の白人女性の地位よりも高いという解釈に対し「自己流の解釈であり、人を馬鹿にしている。黒人社会の女の地位はゼロに等しく六〇年代以降は話にならない。」と反論し「母権制」の解釈の誤解を指摘している。G. Lerner, ed., *Black Women in White America: A Documentary History*, Random House, N. Y., 1970, p. xxiii; Wallace, *op cit.*, 邦訳(一六二、一六三頁)

- (2) アメリカでの近年の研究では以下が特筆に値する。Betty-nan Aptheker, *Woman's Legacy: Essays on Race, Sex and Class in American History*, Amherst, Univ. of Mass. Press, 1982; Janet L. Sims-Woods, "The Afro-American Woman: Researching Her History", *Reference Services Review*, # 11, spring 1983, pp. 9-30; Dorothy

Sterling, ed., *We Are Your Sisters: Black Women in the Nineteenth Century*, W. W. Norton & Company, N. Y., London, 1984; Paula Giddings, *When and Where I Enter: The Impact of Black Women on Race and Sex in America*, N. Y., William Morrow and Comp. Inc., 1984. (河津和子訳『アメリカ黒人女性解放史』時事通信社一九八九) *Jacqueline Jones, *Labor of Love, Labor of Sorrow: Black Women, Work and the Family from Slavery to the Present*, Basic Books Inc. Publishers, N. Y., 1985; Dorothy Sterling, *Black Mothers: Three Lives*, 2nd ed., The Feminist Press, N. Y., 1988. 日本ではシャーリス・ドブソン以下の著作がある。クロン・英美子『黒明からのアメリカ』第九章 文芸春秋社一九八二、藤本和子『植食や食う女たち―聞書・北米の黒人女性』鼎文社一九八二、同『ヘンリーとわたしの朝』朝日新聞社一九八六、歴史研究者による研究が始まったことである。谷中寿子「四章 公民権運動に参加した女性たち」井出「明石編『アメリカ南部の夢』有斐閣一九八七。

(3) 雑誌論文は次の二本がある。David M. Tucker, "Miss Ida B. Wells and Memphis Lynching", *Phylon*, XXXII no. 2, 2nd Quarter, Summer, 1971, pp. 112-122.; Bettina Aptheker, "The Suppression of the Free Speech", *San Jose Studies*, 3:3, Nov. 1977, pp.34-40; Ph. D. 論文は二本がある。Mary B. Hutton, "Rhetoric of Ida B. Wells: The Genesis of the Anti-Lynch Movement", Ph. D. dissertation,

史苑 (第五一巻第一号)

Indiana Univ. 1975.; Mildred Thompson, "Ida B. Wells-Barnett: An Exploratory Study of An American Black Woman, 1893-1930", Ph. D. dissertation, George Washington Univ., 1979. 以下では要約を省略する。Langston Hughes, "Ida B. Wells: Crusader 1866 [sic]-1931", *Famous Negro Heroes of America*, N. Y., Dodd Mead and Company, 1958, pp.155-162.; Sylvia G. L. Dannett, *Profiles of Negro Womanhood*, vol. II, 20th Century, Educational Heritage, Inc., Yonkers, Chicago, Section 1; Crusader against Lynching Ida B. Wells-Barnett, pp.22-26; *Contributions of Black Women to America: Civil Rights*, Columbia, S. C., Kenda Press, 1982 (1981) 2 vols., Chapter IX Ida B. Wells: Anti-Lynchings Campaign, pp.78-85; Thoms C. Holt, "The Lonely Warrior: Ida B. Wells-Barnett and the Struggle for Black Leadership", Chapter 3 (pp. 39-61) in eds., by J. H. F. & August Meier, *Black Leaders of the Twentieth Century*, Univ. of Ill. Press, 1982; Sterling, *Black Mothers*, Chap. 2. Ida B. Wells: Voice of a People, pp. 61-117, 1988. 日本では次に紹介されている。猿谷要「失われた黒人部分―リンチとレイプ・ロ・ウォルズ・バーネット」『アメリカ古典文庫一九〇』鼎文社一九七五、二〇-二四頁。同書にライダの論文「リネオリンズにおける暴徒の支配」("Mob Rule in New Orleans")の邦訳収録。同「人種間戦争、差別と暴力の系譜：三章 妻のライダの記録」『アメリカの戦争―独立から世界帝国へ』講談社、一九八五。

二、反リンチ運動家となるまで

(1) 生い立ち——再建後の南部の中で

アイダは、一八六二年七月一日、ミシシッピ州北部の州境に接するホーリスプリングス(Holly Springs, Miss.)の農園で奴隷の子として生まれた。奴隷制下での屈従の経験がないとは言え、その過酷さは両親から語り継がれ、成人しても奴隷制下での黒人の苦悩を忘れることはできなかった。農園の大工であった父親のジム(Jim Wells)は、強い意志と政治への高い関心の持ち主で、一八六七年の選挙では元主人からの民主党に投票せよとの忠告を無視し、仕事を追われた。母親リス(Elizabeth W. Wells)は、聖書を読みたいと通学した程の向学心と信仰心の厚い女性であった。彼らの四男四女の子供のうち第一子としてアイダは生まれ、厳格に育てられた。再建後の公民権剝奪の動きが始まる頃、メンフィス(Memphis, Tenn.)では致命的な黄熱病が猛威を奮い、二五マイル南のホーリスプリングスの人口をも激減させるに至った。両親と最年少の弟が犠牲となった一八七八年は、アイダの人生の最初の転機となった。

亡き両親に代わり残された弟妹を育てるため、年齢を偽り地方の教員試験を受け、教職で生計を立て始めた。しかしアイダが受けた教育と云えば、解放民援助団(Freedmen's Aid)の設立したシャウ大学(Shaw Univ.)、現在のラスト大学(Rust Univ.)での教育に過ぎず、しかも経済的理由で卒業することはできなかった。大学とは名ばかりで、母も共に通学した読み書きを習う程度の学校であった。後にフィスク大学(Fisk Univ.)の夏期講座に数年間通ったり、教員研修旅行に参加したりするが、大学教育を修了する機会には生涯恵まれなかった。再建後のミシシッピ州の多くの黒人同様、アイダも数年後にはより高い給料を獲得するために大都市メンフィスへ北上することになる。

一八八四年五月四日、通勤列車で嫌煙のため一等車の切符を購入し座るアイダに、車掌は他の車両への移動を強制し、口論の末彼女は列車から降ろされてしまう事件が起こる。アイダは早速裁判に持ち込み、連邦巡回裁判所の前段階の訴訟では勝利を納め五〇〇ドルの損害賠償金を受け取った。アイダの勝訴に対し、一八八四年二月二五日付白人新聞『メンフィス・デイリー・アポール』(Memphis Daily Appeal)には「黒んぼの娘がチェサピーク・オハイオ鉄道から賠償金を手に入れる—喫煙車に黒人の教師を入れるための値段、評決は五〇〇ドル」との見出しで記事が載せられ

た。勝利も束の間、最終的には一八八七年四月五日テネシー州の最高裁で敗北してしまった。この裁判で何よりもアイダを傷つけたのは、彼女が雇ったメンフィスで唯一の黒人弁護士 T・F・カッセルズ (T. F. Cassels) が鉄道会社を買収され裁判で職務を果たさなかったことであった。代わりに白人の弁護士を雇うが、この裁判は一等車と二等車ではなく黒人と白人で分ける、いわゆる黒人差別車両を作る一因となってしまった。

州権が憲法修正第一四条に優先するという一八八三年の最高裁判決以来、南部全体で公然と黒人差別車両が作られていたことは周知の事実である。アイダは、この判決が出て以来、州の法廷に立った最初の黒人であった。この訴訟事件について彼女は、「私は私の裁判が黒人全体にとってより良い結果をもたらすものと期待していた。法律は我々の側にあり、我々に公正な判決を下してくれると確信していたのに……」と悔やみ、「メンフィスの黒人はすぐに忘れてしまい自分は孤軍奮闘した」と回想している。彼女には公の人種差別との最初の出会いであり、活動の発端となる事件であった。

(2) 『フリー・スピーチ』からの出発

黒人教師仲間の週一度の読書会で用いていた新聞『イブ

ニング・スター』(The Evening Star) の編集に一八八六年から携わったことがジャーナリストとしてのアイダの出発点となった。読み書きの不自由な黒人にも読み易いように二音節以上を避けペンネームも一音節で「アイオーラ」(Tola)とした。記事は各地の黒人新聞を賑わし、一八八〇年代後半の著名な黒人新聞からも依頼を受けるようになった。「聡明なアイダ」「新聞界の女王」などと呼ばれたアイダは、黒人新聞会議に女性として初めて出席し、書記を務めるようになった。

黒人編集者の T・T・フォーチュン (T. T. Fortune) にちなみ「フォーチュンの時代」と呼ばれる時期 (一八八〇～一九一〇) に、黒人新聞がほとんど発言権を持てなかったのは、大多数の黒人が文字を読めなかったという事実を負うところが多い。全米の黒人の九割は南部に住み、黒人による発言は黙許されず、一八九〇年で約一三〇社あった黒人新聞社のうち半数は南部に存在したが、ほとんどが声無き声の様な存在であった。北部の都市中心の『インディアナポリス・フリーマン』(Indianapolis Freeman) や『クリーブランド・ガゼット』(Cleveland Gazette) の様な全国レベルでの発言が可能ではなかったが、困難ながら黒人新聞は発言力を強化する方向へ動いていたことは確実であった。

テネシー州で最も好戦的だったとされる黒人新聞『フリ

反リンチ運動家アイダ・B・ウェルズ(岩本)

ースピーチ・アンド・ヘッドライト』(Free Speech and Headlight 以下『フリー・スピーチ』と略記)は、州内で最大規模の最も古いバプティスト派黒人教会の週刊新聞であった。一八八九年から編集者として勤務したアイダは共同経営者となることを望み、所有者で販売担当のナイチンゲール牧師 (Rev. Taylor Nighingale) と営業担当のフレミング (J.L. Fleming) とで権利を三分の一ずつ有するよう株を買収した。自らの新聞社という発言の場を得たアイダは、戦闘的で恐れを知らないとも評価される記事を書き始めた。白人批判ばかりではなく、黒人牧師達への痛烈な記事も含み、メンフィスの黒人エリート達からは好まれなかった。新聞編集に携わりながら教職も続けていたアイダは、目の当たりにした黒人児童の悲惨な教育現場の告発記事を書けるが、これが直接の原因となり、一八九一年にメンフィス市教育委員会から解雇を申し渡され、失職してしまう。

再建後の白人の巻き返しへの黒人の抵抗の声として、『フリー・スピーチ』は存在した。一八八九年当時その件数がピークに達しつつあった黒人リンチに対して、アイダは次のような記事で報復した。

町の新聞は白人がこの町を治めるべきだと言うが、愚かな考えだ。黒人を動物扱いする古い南部の声は葬ら

れ、黒人はもはや三〇年前の黒人とは違うことを認識すべきだ。黒人が最下層にいる時代ではないのだ。放火の濡れ衣で先週リンチにかけられたケンタッキーの黒人を始め、テネシー、ミシシッピ全域で黒人が名も知らぬ(?)白人達のスポーツや楽しみにされている。黒人が力をつけ、冷血な殺人者達を恨み行動して初めてリンチをやめさせることができるのだ。

これに憤慨したメンフィスの白人新聞は「ナイチンゲール牧師は、次のことを熟考すべきだ。強姦者は、その身体で罪の償いをするべきだという、より高度な法律が存在することを。」とリンチを正当化する記事で応じてきた。

以後、経営上の問題を起こしたナイチンゲール牧師がやめ、アイダとフレミングによる『フリー・スピーチ』は、ミシシッピ、テネシー、アーカンソー各州全域で購読数を増やした。一五〇〇部から四〇〇〇部を発行するようになり「黒人の生活に有益な影響を与える記事や、黒人が待望していた記事で満たされている」と強力な支持を得ていた。同紙の攻撃対象は黒人の権利獲得を妨害するもので、白人に限定しなかった。

黒人の例にアイザイヤ・モントゴメリー (Isaiah T. Montgomery) とブッカー・T・ワシントン (Booker T. Washington) を挙げよう。モントゴメリーはミシシッピ河畔

の黒人の町マウンド・バイヨウ(Mound Bayou)を作ったことと有名だが、黒人の選挙権廃止のための一八九〇年の「不名誉な」ミシシッピ州新憲法制定会議に参加した唯一の黒人でもあった。リテラシー・テスト、祖父条項などの実質的に憲法修正第一五条を無効とする動きが出ていたが、その先駆けとしての新州憲法制定会議に黒人自ら出席したことで、『フリー・スピーチ』はモントゴメリーを非難した。

アイダはしばしば反ワシントン派の代表とされるが、ワシントン批判はこの時期にすでに始まっていた。ボストン(Boston, Mass.)の白人新聞『クリスチャン・レジスター』(Christian Register)にワシントンが書いた「南部の黒人牧師の三分の二は、道徳的、知的に人々を教え導くには不適任である」という記事に対して、アイダは「南部から遠く離れたボストンのしかも白人新聞で批判することは無意味である。自分達が行なっているように、南部において同様の告発をすべきだ。」と攻撃した。

(3) メンフィス・リンチ事件(一八九二)

一八八三年の最高裁判決以来南部では黒人リンチがほぼ公然と行われ、一八八〇年代と一八九〇年代にピークに達し、一八九二年には最高で二二六件のリンチ事件が起った。リンチの語源は独立戦争時のヴァージニアのリンチ

(Charles Lynch)だが、司法組織が未発達の開拓時代に犯罪容疑者に対し行われていた。アンテ・ベラム期の南部ではリンチは日常茶飯で、奴隷制廃止論者や逃亡奴隷を助けた者が犠牲となった。一八八九年から一九一八年に、三、二二四人がリンチにかけられ、そのうち二、五二二人が黒人であった。アイダの人生の分岐点ともなった「メンフィス・リンチ事件」(Memphis Lynching)は一八九二年に起こった。

メンフィス郊外の黒人人口密集地に、「みんなの雑貨屋」(People's Grocery Store)とこう食料雑貨店があった。経営者はトム・モス(Thomas Moss)、カルビン・マクドウェル(Calvin McDowell)、ヘンリー・シュアート(Henry Stewart)とこう町でも有力な黒人三人で、店長のトム・モスは、昼間は郵便配達、夜は店で働き、日曜日にはメンヂェリスト日曜学校の教師もした。トム夫妻はアイダの町一番の親友でもあった。

店が繁盛するという理由だけで、一八九二年三月九日に白人暴徒の襲撃を受けた。店には襲撃を予想して黒人達が武装していたが、暴徒ともみ合ううち三人の白人を撃つてしまい黒人達は共同謀議ということで逮捕された。投獄四日後の明け方、副保安官を含む十人の白人達が郡刑務所へ乱入し、まだ眠っている三人を連れ出し、刑務所から北へ

反リンチ運動家アイダ・B・ウェルズ(岩本)

一マイルの所の空き地でリンチにかけた。妻や生まれてくる子供のために命乞いするトムに暴徒達は無数の弾丸を打ち込み、また暴徒の一人のピストルにすぎりつくマクドウェルの拳に発砲したため彼の右手は粉々になり、目玉はえぐり出されるといふ残忍な殺され方だった。

町の黒人の衝撃は大きく、恐怖も増大した。メンフィスでかつてない最大の葬儀の行列が作られたが、事件当日、ナッチェズ(Natchez, Miss.)へ取材旅行中のアイダがメンフィスへ戻った時には、友人トム・モスはすでに埋葬された後だった⁽¹²⁾。リンチの数週間後、アイダの怒りは殺害者達の裁判及び有罪判決を要求した次の記事となって表面化した。

我々メンフィスの善良な黒人市民は、市の財産と成功のために働き、また一八七八年から七九年の黄熱病大流行の時にも、この町が地球上から一掃されるかもしれない恐怖の中で、白人と共に立ち上がってきた。我々はカルビン・マクドウェル、ウィル・スチュアート、トム・モスの殺害者達への公平な裁きを要求する。我々が常に従い支持してきた神と法の名の下に要求し、その指示に従うつもりである⁽¹³⁾。

「神と法の名のもとに」と訴えるが、当時の南部ではただ空しい叫びだと承知していたはずである。同年十月のパンフレット『南部の恐怖』(Southern Horrors)では黒人

宣教師や新聞記者、指導者達が服従するよう勧めてきた法律は自分達を救わなかったと訴えている⁽¹⁴⁾。「白人からのリンチになすすべのない自分達黒人は、自らの身体を自らで守るしか方法はないのだ。我々にできる唯一のことは、金を蓄え町を出ることだ。町は我々の命も財産も守ってはくれない。裁判所では公正な裁判すら行われていない。」と嘆き「私がトム・モスがリンチにあった直後、最初にしたことはピストルを買ったことだ。」と自己防衛の必要性を強調している。また「罨にはまった犬や猫のように死んでいくくらいなら不正と戦った方がましだ。もし自分がリンチ暴徒に出会ったなら逆に攻撃し返すだろう。」と断言している⁽¹⁵⁾。

この事件を境に、アイダはリンチの理由の真偽を確かめたいと思うようになった。今回の「商売が繁盛する」という理由は珍しい例で、理由の大半は南部の白人女性への強姦であった。事実の真偽は問題ではなく噂だけでリンチの対象となる強姦神話は完全に確立されていた。アイダ自身でさえ強姦の記事を読む時、黒人男性に不信感を持っていた。「リンチは違法であり、秩序を乱すが、獣のような奴はリンチにあっても仕方がない。」と思っていたが、罪もない親友の死に遭って「リンチは財産を持った黒人を引きずり降ろし、弾圧する口実だった。」と悟った⁽¹⁶⁾。

親友のリンチ死で開眼したアイダは耳にした七二八件の

リンチ事件を精力的に調査した結果、大半がでっち上げに過ぎず、事実無根の報道だと知る。現実には強姦はなかった、あるいは白人女性が誘ったという事実が明らかになり、州法で禁止されている白人女性と黒人男性との性交渉はかなりの数になり、主導権は白人女性にあったなどの調査結果を報道した。一八九二年五月の最終週の『フリー・スピーチ』では次のような挑戦的な記事を書いた。

『フリー・スピーチ』の先週号以来八人の黒人がリンチにかけられた。三人は白人男性を殺し、他の五人は白人女性を強姦したという理由であった。黒人男性が白人女性を暴行したという陳腐な嘘をこの地方の誰も信じない。南部の白人男性は用心しないとかえって白人女性の道徳的評判を傷つけることにならう⁽¹⁾。

『南部の恐怖』と『鮮血の記録』(A Red Record, 1895)の下地となるこの記事のために、故郷南部を追われることになった。記事掲載直後、アフリカン・メソジスト監督派教会(African Methodist Episcopal Church)の総会出席のためアイダが東部に出た後で、フリー・スピーチ社は白人暴徒の襲撃を受け印刷機械は破壊され、新聞記事用のメモや資料は焼かれました。地元メンフィスでは「もし帰って来るなら裁判所の前で縛り首にしてやる。」との報道がなされているとの知らせを受けたアイダは、フォーチュ

ンの勧めでニューヨークに残り活動を続ける決心をする。彼女は二度と南部に戻れないまま、反リンチ運動家としての活動を展開していくことになる⁽²⁾。

註

- (1) Ida B. Wells, *Crusade for Justice: The Autobiography of Ida B. Wells*, edited by Alfred M. Duster, Chicago, Univ. of Chicago Press, 1970 (以下 Wells, *Crusade*, 以下略) pp. 7-9, 10-12.
- (2) Wells, *Crusade*, p. xviii.
- (3) *Ibid.*, p. 19.
- (4) Wells Diary, April 3, 1886, quoted in Thompson, Ph. D., p. 26.
- (5) Wells, *Crusade*, pp. 30-33.
- (6) Mabel M. Smith, ed., *The Black American Reference Book*, Prentice Hall Inc., Englewood Cliffs, N. J., 1946, pp. 849-850; Gunnar Myrdal, *An American Dilemma: The Negro Problem and Modern Democracy*, Harper & Brothers Publishers, 1944, pp. 908-915.
- (7) Myrdal, *op. cit.*, p. 563; Wells, *Crusade*, pp. 36-37.
- (8) *Free Speech* reprinted in *Memphis Weekly Avalanche*, July 13, 1889, & Sep. 6, 1891. quoted in Tucker, *op. cit.*, p. 114.
- (9) Tucker, *op. cit.*, p. 115; Wells, *Crusade*, pp. 39-41.
- (10) *Ibid.*, pp. 37-39, 40-41.; Herbert Aptheker, ed., *A Documentary History of Negro People in the United*

反リンチ運動家イダ・B・ウェルズ (挿本)

States, 4th ed., N. Y., The Citadel Press, 1969 (1951), p. 778.

(11) リンチの被害者数 (1889-1918)

時期	総計		白人		黒人		人数比		
	計	男	計	男	計	男	計	男	
1889-1893	839	260	258	2	32.2	579	571	8	67.8
1894-1898	774	230	221	9	29.7	544	529	15	70.3
1899-1903	543	88	88	0	16.2	455	451	4	83.8
1904-1908	381	27	27	0	7.0	354	348	6	93.0
1909-1913	362	36	36	0	10.2	326	320	6	89.8
1914-1918	325	61	61	0	18.2	264	253	11	81.2
計	3224	702	691	11	21.8	2522	2472	50	78.2

(NAACP, *Thirty Years of Lynching in the United States, 1889-1918*, NY, NAACP, 1919, reprinted ed. N. Y., Arno Press and The N. Y. Times 1969, pp. 27, 30. より作成)

(2) Wells, *Crusade*, pp. 47-48, 50-51; Tucker, *op. cit.*, pp. 115-116.

(3) *Free Speech*, reprinted in *Kansas City American Citizen*, April, 1 1892, quoted in Tucker, *op. cit.*, p. 117.

(4) Ida B. Wells, *Southern Horrors*, in Ida B. Wells-Barnett, *On Lynchings: Southern Horrors (1892)*, *A Red Record (1895)*, *Mob Rule in New Orleans (1900)*, N. Y., Arno Press & N. Y. Times, 1969, p. 19.; シェンホルム

毎の頁表示のため、引用時にはシェンホルム名と引用頁のみ記す。

(5) Wells, *Crusade*, pp. 52, 62.

(6) *Ibid.*, p. 64.

(7) *Ibid.*, pp. 65-66.

(8) *Ibid.*, pp. 66-67; Sterling, *Black Foremothers*, pp. 82-83.

三、反リンチ運動家としての活動

(1) 東部の黒人女性への影響

フキーチオンが編集する『ニューヨーク・エイジ』(*New York Age*, 以下『エイジ』と略記)のスタッフとなったアイダは、南部の黒人リンチの実状を伝え、強姦神話打破の暴露記事を書き続けた。「真実を伝えることは、私自身と私の人種に負わされた義務なのだと思う。黒人リンチの真相を最初に世界に伝える機会が今、与えられた。」と自伝で繰り返している。彼女の記事が一面トップに出た一八九二年六月二五日付の『エイジ』は一万部発行され、メンフィスでは一千部売れた。強姦の理由でリンチにあった黒人の名前、日付と場所を挙げ、それらが事実無根であることを調査結果を用いて暴露した。

「アイオーラの南部現場」(“Tola's Southern Field”)と

題したコラムを担当し、全米各地の黒人抵抗運動の実状を伝え、黒人社会から熱狂的同意を得ていた。一部を引用してみよう。

アトランタではE・L・トーマス牧師に指導され、市街電車ボイコットに入った。……十月だけで七〇〇ドルの損失となり、黒人の乗車拒否によって白人の収入は減り続ける。……黒人乗客に対する不当な扱いを非難する。二週間前にも黒人車両への乗車を決意した黒人女性が、車から投げ出され、頭を打ち腕を骨折した。……このような行動が他の白人の乗車をも拒否させ、白人の収入がますます減少することを望む。

アイダの反リンチ運動は、一般社会が持っている黒人男性へのイメージを否定する役割を持つと同時に、黒人女性が不道徳であるという偏見への挑戦でもあった。暴露記事を書きつつも黒人男性と白人女性の関係ばかりが強調され、黒人女性の状況が無視されていることに対して「奴隷制時代から、白人男性は当然のように黒人女性を強姦してきた。現在もそれは続いているが、黒人であるために教会も州も新聞も取り上げることもしない。」と、怒りと共に述べている。

これまでの反リンチ運動の功績を認められ、ニューヨークとブルックリン (Brooklyn) の黒人女性二五〇人からな

史苑 (第五一巻第一号)

る「ウイメンズ・ロイヤル・ユニオン」(Women's Loyal Union) から表彰されることになった。一八九二年十月五日のライラック・ホール (Lyric Hall) での表彰式は、黒人女性史に残る出来事であった。会場には婦人参政権運動家のラフィン、黒人女医のマッキニー博士 (Dr. Susan McKiner) 、兩人種共学校の最初の校長ガナーネット (Sarah Garnet) 、そしてこの行事の主催者マシューズ (Victoria Earle Matthews) など、東部の黒人女性活動家が一堂に会した。

彼女達への感謝を込めて、アイダは南部を追われ東部で反リンチ活動を続けるようになった自らの状況と、南部の黒人リンチの現状について講演した。アイダ個人にとって最初の講演であり、以後文筆だけでなく講演での反リンチ活動も始めることになった。また「ピストルを携帯したジャーナリスト」というアイダの存在は同席した黒人女性に刺激を与え、この表彰式直後から黒人女性組織が積極的に作られ始めた。すでに要素はあったとは言え、アイダの講演が彼女達の活動に活性剤の役割をしたことは確実である。一八九二年から九四年にかけてニューヨーク、ブルックリン、ボストンやオマハ (Omaha, Neb.) 、ピッツバーグ (Pittsburgh, Penn.) 、デンバー (Denver, Col.) と全米各地に組織が作られていった。ラフィンは自ら発行の新聞

『女性の時代』(The Woman's Era)で「アイダ・ウエルズが反リンチ運動を行ってきたことが組織設立に刺激となった。」と述べている。但しラフィンは「人種のためではなく女性の進歩のために闘う。」と明言している。またシカゴの活動家F・ウイリアムズ(Fannie Barrier Williams)は、「黒人に対する暴力に黒人指導者達が何もできずにいる時期に、ウエルズを中心に我々黒人女性の力を結集できたことは幸いであり、勇気が湧くことだ。」とも述べ⁽⁹⁰⁾ている。

同時代の黒人女性に刺激を与える契機となったこの表彰式で、表彰と同時に五〇〇ドルの賞金を授与されたが、この資金で念願のパンフレット『南部の恐怖』を刊行した。発行の意図をアイダは序文で次のように述べている。

この声明によって純潔の略奪者を保護したり、また白人デリラに欺かれ敵に渡された哀れな盲目の黒人サムソンを救おうとするのではない。事実を並べることにより真実を伝え、たとえ天地しようともこの偉大なるアメリカ共和国に公正な裁きを要求したのである。⁽⁹¹⁾

『南部の恐怖』発行へのフレデリック・ダグラス(Fredrick Douglass)からの賛辞は、『鮮血の記録』の序文に用いられている。その一部を引用する。

勇敢なる女性よ！ あなたは我々黒人のためになんと計り知れない奉仕をしてきたことか。もしまだアメリカ

カの良心が半分でも残っていて教会や牧師が半分でもキリスト教化されているならば、またもしアメリカの道徳観が黒人への暴行や罪への永続的な刑罰によって無感覚になっていないならば、あなたのパンフレットが読まれている所ではどこでも恐怖と恥と憤りの叫びは天国へと届くことだろう。⁽⁹²⁾

ダグラスは「南部におけるリンチ法」(“Lynch Law in the South”)という論説で、「裁判も陪審もなしに死刑を宣告され、生きながら焼かれた黒人の身体のことを考えよ！」と怒りをぶつけながらも、「黒人への憎悪と迫害への解決策としてのリンチの責任をすべて無知な暴徒に負わせてはならない。報道界や宗教界の指導者達が一致団結して残虐や恥辱に対抗することこそ大切だ。」と説き、南部という一地域から合衆国全体へと広げ、国全体でリンチ問題を解決しなければならぬと結んでいる。

一八九三年の「全ての面におけるリンチ法」(“Lynch Law in All Its Phases”)と題したアイダの講演では、白人聴衆を前に南部から東部での活動を余儀なくされた経過を述べ、怒りを込めて訴える。「人民の人民による人民のための政府とは、南部では暴徒のみによる政府である。自由人の国、勇気ある者の国とは、無法者、殺人者、非道者の国である。言論の自由とは仕事を妨害する力を意味し、

暴徒の意志に背く者から家を奪い、彼らを追放することを意味する。」と。彼女が白人聴衆に訴えたかったことは、一般大衆から反リンチの声を盛り上げてほしいということだった。そのためには全米の新聞報道や説教師の我慢強い改革努力が必要だと言う。全員一致でリンチ暴徒に立ち向かうしか方法はなく、それを説いて歩くのがアイダの役目だった。呼びかけを英国へ広げようとするアイダにダグラスは「行っておいで、私の子供よ。あなたは行くべき人だ。行って話さなければならぬことがあるのだから。」と励ましの言葉を贈る。この言葉を「硬い石の壁に開いた入口」のように深く勇気づけられ英国へと旅立つのだった。

(2) 訪英による反リンチ運動

アイダが英国を訪ねたのは一八九三年と九四年の二回である。東部のクウェーカーの集会でアイダの講演を聞いたキャサリン・インピ(Catherine Impey)が招待したためだった。インピは英国サマセット州(Somerset)出身で、インド原住民のための英語の雑誌『アンチ・カースト』(Anti-Caste)の編集者であった。彼女は有色人種の扱いに興味を示し、アメリカ南部黒人の不当な扱いにも無関心ではいらなかった。アイダの講演によって、大英帝国全域での人種平等への道徳感情を盛り上げようとする意図を持っていた。

アイダの自伝の序文に「我々の運動に対し最高の援助を与えてくれた英国人達の恩に報いるため」とある。英国で反リンチ委員会結成という進展を見たことと、逆に遅々として反リンチ運動が進まない祖国アメリカへの苛立ち、また南部人への怒りや告発という意図もあったのだろう。英国各地での反響は大きく、アイダの活動を積極的に支援し「アメリカ黒人の痛烈な叫び―第二のアンクルトムの小屋」という見出しの記事まで出た。

反面、英国での反響を知ったアメリカ南部白人はアイダを批判し、英国を非難した。白人新聞には「ウェルズの活動がアメリカではどのように見なされているか」の見出しで、南部の事情を十分知らない英国人が口出していることではないと強調した。またミズーリ新聞協会会長のジェイムズ・ジャックス(James Jacks)は英国社会に対し「アメリカの黒人は完全に道徳性に欠け、特に女性は売春婦であり、みんな生来泥棒で嘘つきである。」という声明を出した。政界からの圧力として、ミズーリ州知事ストーン(W. J. Stone)から『ロンドン・ニュース』(The London News)への抗議文を始め、ジョージア州知事ノーソン(W. J. Northen)からは、反リンチ運動は移民を南部から西部へ出させるのが目的だという不可解な見解が出されるなど、知事自らがアイダ批判の行動を起こしていた。

反リンチ運動家アイダ・B・ウェルズ(岩本)

英国滞在中には、合衆国のキリスト教女性禁酒同盟(Women's Christian Temperance Union: WCTU)会長(白人女性フランシス・ウィラード(Frances Willard))との『ウェストミンスター・ガゼット』(Westminster Gazette)紙上での公的論争も行われた。ウィラードがリンチ反対の立場でないばかりか、アメリカ南部を旅行中には人種問題で南部白人弁護の立場であったと、アイダが非難したことが引き金で起こった論争である。ウィラードの黒人に対する態度は「黒人をリンチにかける暴徒はウイスキーなどに比べたらよいものだ。……酒場は諸悪の根源となり、女、子供、家庭を脅かしている。」とのあるインタビューでの答えに表れている。また南部において禁酒運動が敗北したのは黒人のせいだとも述べた。アイダはこの答えを黒人に対する中傷だと非難し、新聞紙上で「ウィラード女史は黒人問題に関してアメリカ白人の大部分と同じだ。」と攻撃した。キリスト教女性禁酒同盟南部支部では黒人を排斥して黒人への憎しみを強調していたし、キリスト教女性禁酒同盟への黒人女性の入会は一人も許されなかった。英国内の論争であったためか、ウィラードも英国反リンチ協会の会員になるという妥協姿勢を見せた。¹⁶⁾祖国で十分な成果があげられなかった反リンチ運動も英国では多くの賛同者を得てまずは成功したと言える。

(3)シカゴ万博(一八九三)での告発

二回の訪英の間の一八九三年にコロンブス到来四〇〇年を記念して、一九世紀後半のアメリカの高度成長を象徴する都市シカゴ(Chicago, Ill.)で万国博覧会が開催された。全世界に向けアメリカの繁栄を誇示した万博だったが、黒人には屈辱であった。会場の一郭を「ホワイト・シティ」と呼んだが、黒人には会場全体が「白い都市」に見えた。政府は最初から黒人の万博参加を拒否し、公式の参加は不可能だった。黒人の訪問者達は「偉大なアメリカの白い象」とか「白いアメリカの世界博覧会」と呼び、失望と幻滅を感じていた。¹⁷⁾

シカゴの不動産業者の出資で、女性館が置かれたが、参加できた黒人女性は、ニューヨークと、フィラデルフィア(Philadelphia, Penn.)出身者で、縫物や絵画を出品しただけであった。女性館設立委員会の構成メンバーからは締め出され、黒人女性も参加したいという要求を委員会は無視し、「黒人を代表して」という名目で白人女性が参加するという有り様だった。¹⁸⁾

唯一の黒人参加は、他国同様に参加の招待を受けた独立共和国のハイチ(Haiti)だったが、合衆国の黒人には参加の機会はなかった。ダグラスとアイダは万博見学者に現状を知らせるために、小冊子作成を決意する。黒人新聞社を

通して小冊子印刷のために五〇〇〇ドルの寄付を集めるよう依頼するが、黒人編集者達の中でも賛否両論に分かれた。外国からの訪問者のために英、仏、独、西語に翻訳し無料配布するはずだった。資金調達のかげ声から四カ月後、寄付はアイダによれば「ほとんどないのとかなり多いとの中間程度」で英語での発行がやっとの状態で無料配布は望めなかった。小冊子は何千部もが売られたが多くのハイチ館の前で売り続けたアイダの努力に負った。

小冊子は『黒人がコロンビア万博に参加しない理由』(*The Reason Why the Colored American Is Not in the World's Columbian Exposition*)と題され、副題は「アメリカ文芸への黒人の貢献」と付けられた。現存する小冊子には、五年後の一八九八年八月三日の日付で「二万部のコピーが用意されているので希望者は三セントの郵送料を同封の上アイダ・B・ウェルズの自宅宛申し込んでほしい。」とある。シカゴ万博の残部を配布し続けていたようだ。本文は八一頁からなり、序文は仏、独、英語の三カ国語で書かれてある。「真実の探求者達へ」と題されたアイダによる序文を要約してみる。

文明諸国に対し万博への参加を呼びかけた合衆国だが、その道徳的高尚は無視されてきた。二五〇年間の奴隷制の後自由を得てわずか二五年の黒人の進歩及び合衆

国の制度への偉大なる貢献についてここに展示し紹介する。合衆国の全人口の一割以上を占める八〇〇万人の黒人は、もとは一六二〇年のピューリタンのプリマス到着より一年早く上陸しているのだ。合衆国の繁栄と文明に貢献し、工業化商業化の大半の労働力は我々黒人によっているのだ。

序章ではダグラスがアメリカ社会での黒人の貢献を力説し、転換期の今、今日の成り上がり者は明日のエリートとなることを忘れず、上昇する努力を怠らないようにと訴える。無知と偏見から目覚め、無法状態で暴行殺人が行われている現実を見極めようと呼びかける。

無法状態の南部についてアイダが「リンチ法」の章で、無法時代の私刑が現在なお行われている現状を暴露している。写真入りでリンチの事実を伝え、原因とされた強姦神話をこれまでの調査結果を並べ、否定している。彼女が呼びかけたリンチ撲滅の方策は章末の次の言葉に集約できる。「法律を強化し白人黒人を問わず全ての人が法の下に公正な裁きを受けられるためには、法律を強化しようとする一般の人々の意向が必要である。」と。一般大衆からの反リンチの声の盛り上げが当面のアイダの使命であったので、シカゴ万博での告発は、全米、全世界への告発であった点で意義は大きい。

註

- (1) Wells, *Crusade*, pp. 63, 69.
- (2) *Ibid.*, p. 69; *Contributions of Black Women*, p. 80.
- (3) "Iola's Southern Field", *The New York Age*, Nov. 19, 1892. in Gerda Lerner, *Black Women*, pp. 539-540.
- (4) Herbert Gutman, *The Black Family in Slavery and Freedom, 1750-1925*, N. Y., Pantheon Books, 1976, p. 536.
- (5) Wells, *Crusade*, p. 70.
- (6) *Ibid.*, pp. 78-79; Giddings, *op. cit.*, p. 83.
- (7) Wells, *Southern Horrors*, Preface.
- (8) —, *A Red Record*, Preface by F. Douglass.
- (9) Frederick Douglass, "Lynch Law in the South", *North American Review*, 155, July, 1892, pp. 17-24; —, "F. Douglass on Lynching, 1892", in H. Aphheker, *Documentary*, pp. 794-795.
- (9) Ida B. Wells, "Lynch Law in All Its Phases", *Our Day*, on. 65, May 11, 1893, pp. 333-347, partly quoted in *Women and Religion in America*, vol. 1. Ruether & Keller, H. & R. Publishers, S. F., 1982, pp. 334-337.
- (11) Wells, *Crusade*, p. 86.
- (12) *Ibid.*, pp. 82, 85.
- (13) *Ibid.*, p. 4 (Preface); Tucker, *op. cit.*, p. 119.
- (14) Lerner, *Black Women*, p. 436; Thompson, Ph. D., pp. 116-117.
- (15) *Literary Digest*, 11 Aug. 1894, pp. 421-422, quoted in Thompson, Ph. D., p. 117.
- (16) Lerner, *Black Women*, p. 197; Wells, *Crusade*, pp. 151-152, 201-212; Giddings, *op. cit.*, pp. 90-94, 91n.
- (17) E. M. Rudwick & A. Meier, "Black Man in the 'White City': Negroes and the Columbian Exposition, 1893", *Phylon*, 26, Winter 1965, p. 354.
- (18) *Ibid.*, pp. 354-355; Ann Massa, "Black Women in the 'White City'", *Journal of American Studies*, 8, Dec. 1974, p. 320; Chapter VI. THE REASON WHY, by F. L. Barnett, in Wells, F. Douglass, I. G. Penn, & F. L. Barnett, *The Reason Why the Colored American is Not in the World's Columbian Exposition*, Chicago, Ida B. Wells, 1893, pp. 65-66.
- (19) Rudwick & Meier, *op. cit.*, pp. 356-357.
- (20) Wells, "TO THE PUBLIC", *The Reason Why*, back of front page.
- (21) *Ibid.* PREFACE, "To the Seeker After Truth", p. 1.
- (22) *Ibid.*, Chapter I. INTRODUCTION by Frederic Douglass (pp. 2-12), & Chapter IV. LYNCH LAW by Ida B. Wells (pp. 25-39).

四、おわりに

アイダ・B・ウェルズを黒人女性史に位置づける上で、人種「性」リンチと「三つの軸を設定」の検討を行って

きた。反リンチ運動とは、黒人の人間としての権利獲得を主張することであり、そのためには強姦神話打破という南部ではほぼタブーとされた事柄に挑戦せざるをえなかった。アイダはリンチの現場調査を重ねて、現実には強姦はなかった、あるいは白人女性が誘ったという事実を突き止めた。事実を暴露することは、黒人男性の人間としての権利主張にはつながるが、白人女性には不利であった。強姦神話は、黒人女性が不道徳であるという神話と対をなすもので、同じ女性でありながら、白人と黒人では極端に異なる南部の状況の中で、アイダは白人女性にとって不利なことを積極的に暴露することによって、自らの人種の権利を守ろうとしたのである。

黒人と女性と双方の権利獲得の困難さは、厳しい現実に晒された黒人女性が誰よりも実感していたことである。奴隸制時代から黒人女性への強姦は当然のこととして行われていたし、解放後もなお続いていることに對する怒りは、すでにアイダが述べている通りである。女性としての部分を強調することは、白人女性保護につながるものでは決まらなかった。南部の白人男性が死守しなかった南部白人女性の貞節は、黒人女性アイダのペンによって、もろくも崩れたのであった。単独で暴露記事を書き続けたアイダと比べ、他の黒人女性の指導者たちはどの様な立場をとったの

であろうか。

反リンチ問題は全体的に黒人女性組織の主要な関心事で、常に年次大会の議題となり続けた。しかしその目的は、黒人女性自身あるいは黒人の家庭の擁護のために防止策が検討されたに過ぎず、アイダが行ったような暴露手段に訴える方法は取らなかつた。⁽¹⁾ 自らの組織の議題とはしても実質的に社会へアピールする直接的な方法には結び付かなかつた。黒人女性組織作りの契機がアイダのライラック・ホールでの講演であったことはすでに述べたが、反リンチ運動に影響を受けた彼女達もアイダの運動に直接参加することせず、組織運動による黒人の権利獲得の方法を選んだ。

黒人女性は一九世紀を通して組織していたが、まずは地域レベルで教育や、慈善、福祉のために始められた。この中には、アイダ・B・ウェルズ・クラブ (Ida B. Wells Club) も含まれた。シカゴに拠点を置き主にセツルメント活動を行った。小規模組織の合体から代表的な二つの組織へまとまった。ラフィンによる黒人女性全国連合 (The National Federation of Afro-American Women: NFA-AW) とテレルによる黒人女性連盟 (The Colored Women's League: CWL) は、一八九六年に統合されることとなる。統合設立の呼びかけには、先駆的女性組織者の一人としてアイダも参加している。

反リンチ運動家アイダ・B・ウェルズ（岩本）

アイダの命を賭けた反リンチ運動と、その手段としての強姦神話打破という挑戦的勢力が同時代の黒人女性に与えた影響は大きかった。しかし、全米黒人女性協会が設立されるという一八九六年の時点では、共に活動しようという黒人女性が現れないまま、彼女は黒人の権利と女性の権利の双方の獲得のため、単独のまま危険と背中合わせて闘ったのである。

註

- (1) Gerda Lerner, *Black Women*, pp. 211-222.
- (2) —, "Early Community Work of Black Club Women", *Journal of Negro History*, LIX, no. 2, April, 1974, p. 158.

〔追記〕 本稿作成にあたって、指導教授であった富田虎男先生（立教大学）に格別のご指導とご高配を賜わった。記して厚くお礼申し上げます。

Special thanks to Bettina Aphelker for giving me access to very hard-to-get important primary sources, the copy of the pamphlet, *The Reason Why the Colored American is Not in the World's Columbian Exposition*

Appreciation for Janet Sims-Woods for helping and giving me many good suggestions. She is a black female reference librarian of Moorland-Spingarn Research Center of Howard Univ..

（一九八七年度立教大学史学専攻博士課程前期課程修了・東京女子大学現代文化学部助手）